



Title	研究ノート：アイヌ語の人称体系における格の分布の不均衡について
Author(s)	佐藤, 知己
Citation	言語科学研究, 1, 12-17
Issue Date	2024-03-29
DOI	10.14943/110399
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/91822">http://hdl.handle.net/2115/91822</a>
Type	article
File Information	1_02-SATO.pdf



[Instructions for use](#)

# 研究ノート：アイヌ語の人称体系における格の分布の不均衡について<sup>1</sup>

佐藤 知己

## 1. はじめに

アイヌ語の動詞の人称表示は、1人称と2人称とで格表示（主格、目的格）の分布が異なることが知られている。しかし、なぜ、人称によって格の分布状況が異なるのかの理由はこれまで問題にされてこなかったと言える。本稿では、今後のさらなる検討を促すものとして、この現象が共時、通時両面で注目に値するものである可能性があることを指摘するものである。

## 2. アイヌ語の諸方言における2人称の格表示

アイヌ語の人称の格表示については、基本的な点でさえ、各方言の資料がきちんと揃っているわけではない。気付いた範囲で記せば、概略、以下のようになるだろう。旭川方言が他方言と一部、異なっているが、方言による大きな差は、少なくともこの部分に関してはないことがわかる。問題は、1人称と2人称で、格の区別の様式が異なる、という点である。1人称では、主格と目的格の区別があるのに、2人称では、どの方言でも主格と目的格の区別がないのである。

表. 各方言におけるアイヌ語の人称表示の格分布

	1人称単数主格	1人称単数目的格	2人称単数主格	2人称単数目的格	2人称複数主格	2人称複数目的格
千歳方言	ku-	en-	e-	e-	eci-	eci-
幌別方言	ku-	en-	e-	e-	eci-	eci-
鶴川方言	ku-	en-	e-	e-	eci-	eci-
沙流方言	ku-	en-	e-	e-	eci-	eci-
静内方言	ku-	en-	e-	e-	eci-	eci-
様似方言	ku-	en-	e-	e-	eci-	eci-
帯広方言	ku-	en-	e-	e-	eci-	eci-
旭川方言	ku-	en-	e-	e-	es-	es-
樺太方言	ku-	en-	e-	e-	eci-	eci-

2人称単数主格接辞の e- と 2人称単数目的格接辞 e- の例は以下のようなものである。同じ形が

<sup>1</sup> 本稿は令和4年度科学研究費「基盤研究(C)22K0050102:研究代表者:佐藤知己(北海道大学):古文献資料によるアイヌ語史の再検討」に基づく研究成果の一部である。なお、本稿で用いられているアイヌ語の語形は、千歳方言話者白沢ナベ氏、鶴川方言は新井田セイノ氏、静内方言は織田ステノ氏、様似方言は岡本ユミ氏のご教示による。幌別方言は知里(1936)、沙流方言は田村(1988)、帯広方言は田村(2005)、旭川方言は田村(2001)、樺太方言は村崎(1979)による。

どちらの格の意味でも用いられることがわかる<sup>2</sup>。

- (1) cikarkarpe e-φ-ninu wa  
 礼服 2単主語-3単目的-縫う て  
 e-φ-kor huci e-φ-kore akusu  
 2単主語-3単目的-持つ 祖母 2単主語-3単目的-与える たら  
 「礼服をお前が縫ってお前の祖母にお前が彼与えたら」

- (2) toankur cep sinep φ-e-kore a ruwe?  
 あの人 魚 一匹 3単主語-2単目的-与える た 事  
 「あの人がお前に魚を一匹与えたの？」

さらに、表から明らかのように、この状況は少なくとも現在知られているアイヌ語に関しては、極めて基本的な特徴であって、アイヌ語の非常に古い特徴なのではないかと推測されるのである。それでは、このような、人称による格の分布の違いは、どのような要因に基づくもののだろうか。少なくとも、現代のアイヌ語に関して、この差異の説明に役立つような言語事実を見つけることは、必ずしも容易ではない。おそらく、過去のアイヌ語においては relevant な特徴であったが、その後、失われてしまった何らかの文法カテゴリーの反映である可能性がある。根本的な解決策はいまのところ見つかっていないが、以下に関連すると思われる問題点を簡単ではあるが、指摘しておきたい。

### 3. 共感度 (empathy) と格表示

既に述べたように、アイヌ語の人称表示は、ゼロ要素である3人称は別として、1人称と2人称とでは、今日知られている限りのアイヌ語方言において、格の分布に大きな違いがあることがわかる。すなわち、1人称には存在する主格と目的格の区別が、2人称においては、単数、複数を問わず、いずれの方言においても報告されていないのである。これまでの研究において、この格分布の不均衡が問題にされたことはなかったと思われるが、あらためて考えてみると奇妙である。もともと、2人称にも主格、目的格の格の区別があったが、歴史的な変化によって合流し、区別が失われた、という可能性もあるが、ここでは、もう少し、別の可能性もあることを指摘しておきたい。

Mithun (1991) は、「分裂自動詞性 split intransitivity」について、Guarani 語、Lakhota 語、Central Pomo 語、Caddo 語、Mohawk 語に基づいて論じた論考であるが、その議論の中で、Mithun は Central Pomo 語において、control (制御性) の有無が、自動詞主語の格選択 (動作主格か、被動作主格か) に重要な影響を及ぼすことを述べている。しかし、control (制御性) が存在しないと考えられる状態述語であっても、「背が高い」のような固有の性質を持つ述語の場合は、動作主格 (2a) が用いられる、と述べている<sup>3</sup>。

<sup>2</sup> 略号は以下の通りである。2=2人称、3=3人称、単=単数、複=複数、主語=主格人称接辞、目的-目的格人称接辞。

<sup>3</sup> Central Pomo 語の形式の表記はフォントが使用できないので簡略化して表記する。

Central Pomo inherent states (FJ)

<i>ʔa· ʔe qól.</i>	'I'm tall.'	<i>ʔa· ʔe šmá baku.</i>	'I'm deaf.'
<i>ʔa· ʔe yá·.</i>	'I'm strong.'	<i>ʔa· ʔe nasáy.</i>	'I'm blind.'
<i>ʔa· ʔe q'dí.</i>	'I'm good.'	<i>ʔa· ʔe k'lí.</i>	'I'm dark.'
<i>ʔa· ʔe baséʔ.</i>	'I'm ugly.'	<i>ʔa· ʔe qašóy.</i>	'I'm alive.'
<i>ʔa· ʔe hinʔil.</i>	'I'm Indian.'		
<i>ʔa· ʔe mšú· ʔnaw.</i>	'I'm beautiful.'		
<i>ʔa· ʔe dóq'il.</i>	'I'm righthanded.'		

(Mithun 1991: 521)

他方、状態述語で、結果状態 (inchoative) を意味する場合は、受影性 (affectedness) が高いため、非動作主格が用いられることを、恒常的な状態述語と対比して述べている (以下の例では最初の人称要素 (1 人称 *ʔa·*、2 人称 *mu·l*) が動作主格、2 番目の人称要素が非動作主格 (1 人称 *to·*、2 人称 *mu·tu*) である)。

Central Pomo inchoatives (FJ):

a. <i>Yém ʔe ʔa·.</i>	'I am old.'
<i>Yémaq' ʔo·.</i>	'I have gotten old.'
<i>Yém ʔe mu·l.</i>	'He is old.'
<i>Yémaq' mú·tu.</i>	'He has gotten old.'
b. <i>P<sup>h</sup>úy ʔe ʔa·.</i>	'I am fat.'
<i>P<sup>h</sup>ú·čya ʔo·.</i>	'I have gotten fat.'
<i>P<sup>h</sup>úy ʔe mu·l.</i>	'He is fat.'
<i>P<sup>h</sup>ú·čya mú·tu.</i>	'He has gotten fat.'
c. <i>ʔa· mačún.</i>	'I am lame.'
<i>ʔo· mačúnaq'.</i>	'I got crippled.'
<i>Mu·l mačún.</i>	'He is lame.'
<i>Mú·tu mačúnaq'.</i>	'He got crippled.'

(Mithun 1991: 521)

興味深いのは、Central Pomo 語では、人称によっても格表示が影響を受けることである。次の例が示すように、知覚の状態述語は、1 人称では恒常的な状態述語と異なり、被動作主格の人称表示を取るが、3 人称では恒常的な状態述語の場合と同じく、動作主格の人称表示を取っている。Mithun は「「暖かい」という述語は通常、1 人称に対しては被動作主格代名詞が用いられるが、3 人称に対しては動作主格代名詞が用いられる。話し手は他人が感じていることを感じていると主張しないのだ」と説明している。つまり、同じ「暖かい」という述語に対して、1 人称にのみ、動作主格と被動作主格の区別がある、という状況であることがわかる<sup>4</sup>。Mithun はこの事例が「共感度 empathy」という概念に基づくとしている<sup>5</sup>。

<sup>4</sup> ただし、Mithun のこの部分の説明だけでは、2 人称の場合にどうなるのかは明らかでない。

<sup>5</sup> ちなみに、ここでの Mithun の議論は、久野 (1978: 134) の「共感度 empathy」、および久野 (1978: 325) の「発語当事者の視点ハイアラキー」を組み合わせた概念にほぼ基づいていると思われる。

## Central Pomo empathy and case (FJ):

a. <i>Hó m̥'ḁ t̥o.</i>	'I (PATIENT CASE) feel warm.'
<i>Hó m̥'ḁ mu-l.</i>	'He (AGENT CASE) feels warm.'
b. <i>t̥o q̥'ḁʔán·taw.</i>	'I (PATIENT CASE) was dreaming.'
<i>Mu-l q̥'ḁʔán·taw.</i>	'He (AGENT CASE) was dreaming.'
c. <i>šyá·č'ḁ t̥o.</i>	'I (PATIENT CASE) am afraid.'
<i>šyá·č'ḁ mu-l.</i>	'He (AGENT CASE) is afraid.'
d. <i>t̥o maʔáčo·mdál.</i>	'I (PATIENT CASE) am starving.'
<i>Mu-l maʔáčo·mdál.</i>	'He (AGENT CASE) is starving.'

(Mithun 1991: 522)

Central Pomo 語におけるこのような格表示をもって即断することはもちろんできないが、アイヌ語の人称表示においても、より動作主格的な主格人称表示と、より非動作主格的である目的格人称表示の区別が報告されているのは1人称のみである、これまで、このような不均衡の説明はなされていなかったが、Central Pomo 語の人称表示にみられるような、共感度 (empathy) の差が、人称による格分布の不均衡を招いている可能性もあるのではないだろうか。なお、共感度に関しては、以下のような事例も注意される。

- (3) kani anak arikinne ku-merayke humi an pe,  
 私 は とても 1 単主語-寒い 感じ ある のに  
 e-popke noyne ku-yaynu.  
 2 単主語-暖かい そう 1 単主語-思う  
 「私はとても寒いのに、お前は暖かそうに私は思う。」

アイヌ語は *humi ne* (*humi an*) 「気がする、感じがする」という形式を用いて知覚表現を形成するが、詳細は今後の検討を待たなければならないが、多くの場合、1人称について用いられるようである。この例では、日本語と同様、2人称に対しては、*noyne* 「～そう (だ)」という形式が用いられている。以下のように2人称に関して *humi ne* 用いられた例がないわけではないが、聞き手の立場になって叙述している場面であり、どちらかと言えば例外的な事例ではないだろうか。このように、共感度の差異にアイヌ語が全く無関心、というわけではないと思われる<sup>6</sup>。

<sup>6</sup> なお、人称の表には示していないが、アイヌ語の1人称複数には、主格、目的格の区別に加え、主格に自動か他動かの区別がある。この区別が何に基づくかは共時的な説明が必ずしも容易でないが、複数性は指示範囲の拡大を含意し、他動性 (transitivity) の減少をもたらすので、他動性が問題とならない自動詞の表示に他動詞主格と同一の表示を取ることを回避するシステムが採用されたと見ることが可能かもしれない。包括的1人称複数の場合は、さらに指示範囲が広いため、他動性に加えて動作主性 (agency) の低さが加味され、かつては広く活格、非活格の区別があった可能性がある、ということになるだろう。まとめると、アイヌ語の人称表示は「共感度」の違いによって主格・目的格の区別があるものとならないものに二分され、次に、主語の他動性が相対的に低い1人称複数では自動詞に専用の表示が加わ

- (4) e-nina                      kusu   kim   ta   e-arpa                      humi   ne   kuni  
2 単主語-薪取りする    ために   山   に   2 単主語-行く   感じ   である   と  
e-ramu                      kor   e-arpa                      wa   kusu  
2 単主語-思う   つつ   2 単主語-行く   て   そのために  
「お前が薪取りをするために山に行く気がしたとお前が思いつつ行ったので」

また、Central Pomo 語における共感度の現象は、分裂自動詞性と密接な関連を持つが、アイヌ語においても、北海道方言、千島方言に関連すると思われる現象のあることが指摘されている (Sato and Bugaeva 2023)。ここでは、この点について、まだよく研究がなされていない樺太方言についても、同様な現象があることを指摘しておきたい。Plsudski (1912: 45) には、Inanupirika という名前を持つ女性の物語が記録されている。筆者は、40 年前の学生時代にこの物語を読んだ時、この名前に違和感を持った。この形式は、i-nanu-pirika 「人の・顔・良い」と分析されるが、なぜ、i-「人の (不定)」が接頭するのか、あまり類例がない、と感じたのである。i は、「人を、人の、ものを、ものの」を意味する不定の派生接辞であるが、おそらく、通時的には、包括的 1 人称複数目的格 i-「私達を」に由来すると思われる。その起源や機能はともかく、nanu-pirika は、「～の顔がきれいだ」という自動詞なので、それに i- が接頭すると、「～の」の部分に i- が入るので、結果として動詞の項が充足されてしまうことになる (アイヌ語学ではそのような動詞を完全動詞と呼ぶ)。アイヌ語では、自動詞は名詞に自由に転成できるが、完全動詞は必ずしもそうではないので、現時点で考えると、そういう形式が人名のような「名詞」として用いられる、という点に、なにかしらの違和感を覚えた、ということなのだと思う。しかし、今、あらためて考えてみると、この i- は、nanu-pirika 「顔がきれいだ」という状態述語全体の「主語」を表示していると考えべきだ、というのが筆者の意見である。つまり、「人が (i-) 顔がきれいである (nanu-pirika)」という文の構造をしている、と考えるのである。現在のアイヌ語には、i- に「主語」を表す用法は、ごく一部を除き、ほとんど見られず、「目的語」としての用法が主流であるが、ごくわずかだが一部の方言には述語の control 性が低い場合に対して、主語用法の例も見られる。Inanupirika は樺太方言にも同様な例があることを示唆するものではないだろうか。なお、人名に対して「人が顔がきれいである」という文としての解釈を与えるのは奇妙に思われるかもしれないが、アイヌ語の場合は必ずしもそうではなく、むしろ、適正ではないか、と考える。アイヌ語の人名は、同名が原則、ないことが知られている。いわば、神に対する人間の ID のようなものなので、同名だと具合が悪いわけである。では、同名が生ずることをどうやって防止するか。おそらく、その 1 つの手段として、「文の形にする」という方策が用いられたのではないだろうか。nanu-pirika だと、「～の顔がきれい」という自動詞になるが、それだと語彙項目なので、一般的過ぎて、同名があちこちに生ずる恐れがある。しかし、i-nanu-pirika 「誰か、人が顔がきれいである」という文の形にしてしまうと、同名が生ずる危険性は大幅に減るであろう。また、日常語では i- の主語用法はほとんど廃れたが、人名のような伝統文化的な性格が強い語彙の中では保存された、と考える余地もあるのではないだろうか。ちなみに、アイヌ語の人名に関して一言すれば、文化的な理由で、いわゆる「良い名前」は避けられるのが普通である。なぜかという、おそらく、良い名前を付けると、悪神も呼び寄せてしまう、と考

---

り、さらに、主語の動作主性が相対的に低い 1 人称包括的複数では、自動詞に 2 種の活用が区別され、動作主性が低い場合に専用の表示が加わる、というシステムが構築されたのではないかとと思われる。

えられていたからであろう。従って、Inanupirika という名前は、アイヌ文化的には不適切な名付け、ということになると思われる。物語の中の Inanupirika という名のヒロインは、はたせるかな、その美貌があだとなり、袖にした男に恨まれて越冬用の食料庫を破壊され、春になる前に食料が尽きて、一族もろとも非業の最期を遂げてしまう。「良い名前を付けると不幸になる」という教訓が含まれた物語と思われる。

#### 4. おわりに

アイヌ語の人称表示の格分布は、1人称にのみ主格、目的格の格の区別があり、2人称は主格、目的格が同形、という格の区別の不均衡があり、これまでその原因については深く考察されることがなかったと言える。この現象を考察する上で、今後、「共感度 (empathy)」が問題になる可能性があることを、格の区別に共感度が関与する Central Pomo 語の事例を紹介して示した。

#### 参考文献

- 知里真志保 (1974 [1936]) 『アイヌ語法概説』(『知里真志保著作集』4 東京:平凡社 所収)
- 久野暉 (1978) 『談話の文法』東京:大修館書店.
- Mithun, Marianne (1991) Active/agentive case marking and its motivations. *Language* 67/3: 510-546.
- 村崎恭子 (1979) 『カラフトアイヌ語文法篇』東京:国書刊行会.
- Pilsudski, Blonislaw (1912) *Materials for the study of the Ainu language and folklore*. Cracow: The Imperial Academy of Sciences.
- Sato, Tomomi and Anna Bugaeva (2023) On stative/active intransitive split within tripartite alignment: A case of Kuril Ainu. Presentation at the 2023 ICHL Conference. Heidelberg University. 7 September 2023.
- 田村すず子 (2001 [1971]) 「アイヌ語石狩方言の人称代名詞と人称接辞」(『アイヌ語考4』東京:ゆまに書房 所収)
- 田村すず子 (1988) 「アイヌ語」『言語学大辞典第1巻』6-94. 東京:三省堂.
- 田村すず子 (2003) 『アイヌ語樺太・名寄・釧路方言の資料』大阪:大阪学院大学.
- 田村すず子 (2005) 『アイヌ語帯広方言の資料』札幌:札幌学院大学.

(サトウ トモミ・文学研究院教授)